子どもの体力向上のためにできること

スポーツ庁委託事業「学校における体育・スポーツ資質向上等推進事業」～子どもの体力向上推進シンポジウム～

町教育委員会と町内のスポーツクラブでつくった南関町体力向上コンソーシアムは6日、「子どもの体力向上推進シンポジウム」を町公民館の大ホールで開催しました。

これは、子どもの体力向上推進をテーマに開催。当日は、町内の小中学校教諭ら75人が子どものスポーツ環境の大切さなどを学びました。

萩裕美子東海大体育学部教授の講演や平崎和雄九州看護福祉大准教授や谷口教育長らとの意見交換会もあり、平崎准教授は「子どもの体力作りは、大人が環境を整えてあげることが必要」と述べました。

体育の授業づくりの一環として、ボールをキャッチできるか競う「スポーツテンカ」を、お笑い芸人のワッキーさんが紹介し、ステージ上で第一小学校教諭の高木友視先生・有村将先生がいろんなキャッチに挑戦しました。

スポーツテンカはワッキーさんが日本レクレーション協会と共に開発。子どものころに遊んだ「テンカあそび」を参考に競技としてアレンジしました。

ワッキーさんは、「2人いれば、ひとつのボールと少しの空間があれば誰でも気軽に始められます。見ても楽しい・やっても楽しいスポーツなので、休み時間、放課後に体を動かしてスポーツテンカを広めてください」と思いを語りました。

その後、日本レクレーション協会よりレクリエーション元気アップタウンの全国第一号の市町村としての認定書の授与式もされ、南関町から他自治体に広がっていくようなモデルを今後創っていくとのことでした。

3

1

2

4

5

写真の説明

1スポーツテンカに挑戦する有村先生（左）と髙木先生（右）2子どものスポーツ環境の大切さについて講演する萩裕美子教授3スポーツテンカについて説明するワッキーさん4意見交換会の様子5レクリエーション元気アップタウン認定書授与後の写真撮影

人権について考える一日に

南関町人権フェスティバル

町人権フェスティバル実行委員会（会長:谷口慶志郎教育長）は、2月3日、「第23回南関町人権フェスティバル2019」を町公民館で開催しました。

会場には、町内の全小中学生が描いた人権啓発のポスターを展示。ステージでは、南関ひまわり幼稚園児、小中学生、きずな解放子ども会が、学習発表をしました。

その後、絵本『いのちをいただく』の原案者である坂本義喜さんが「いのちと仕事（いのちをいただく）」と題し、一頭の牛との出会い、そして命の大切さについて講演。

来場者した小学生は、「これからは、いのちを大切にして、好き嫌いなく食べたい」と感想を述べるなど、改めて人権について考える一日となりました。

▶2連覇を達成した南関町チーム

南関町が2連覇

第43回玉名郡駅伝大会

玉名郡体育協会は1月13日、和水町体育館をスタート・ゴールに第43回玉名駅伝大会を開催しました。

大会は、選手たちの力走により白熱したレースが展開され南関町は昨年に続き二連覇しました。2区の津留萌香さん（関町）、4区の内野輝さん（関町）、7区の村上史洋（長山・ふるさと選手）の3名が区間賞に輝きました。

今大会には、1市4町（玉名市は中学校区別）の男女混合10チームが出場。選手たちは、10区間41.5キロのコースを駆け抜けました。

1位	南関町チーム	2時間17分45秒
2位	和水町チーム	2時間21分10秒
3位	玉名市玉名チーム	2時間22分01秒

巨人の三軍監督に就任

井上真二さん

南関町出身で元プロ野球選手の井上真二さんが佐藤町長を訪問し、読売ジャイアンツの三軍監督に就任されたことを報告しました。

井上さんは久重出身。熊本工業高校を卒業後、1984年にドラフト5位で読売ジャイアンツに入団。1998年に現役を引退された後もコーチやスカウトとして活躍されました。

井上さんは「これから若い選手を育成し、主力として活躍できるように頑張ります」と語り、佐藤町長は「苦しい時期を乗り越えられて監督として就任された。“頑張れば夢をかなえることができる”ということを子どもたちに示してほしい」述べました。

▶左から井上さん、佐藤町長

▶消防署員から説明を受け消火の体験する伝楽人の皆さん

防災意識を高める

御茶屋跡で防火訓練

国指定史跡・南関御茶屋跡で1月23日、防火訓練が行われ、貴重な文化財を守るため関係者が通報や放水の手順などを確認しました。

毎年1月26日は文化財防火デーに制定されています。訓練には、御茶屋跡を管理する南関宿場町伝楽人（宮尾洋一会長）や消防署などから約30人が参加。伝楽人の通報から役場消防隊と消防署員が連携して放水するまでの一連の作業を迅速に行いました。

放水作業後、消防署員から初期消火の対応や消火器の使い方の講習を受けました。消火器を体験した伝楽人は「1年に1度こうして指導してもらえるのはありがたい。これからも、火の取り扱いは十分に注意したい」と防災に対する意識の変化を語りました。